

## トピック 1 イン트로ダクション

2022 年 9 月 16 日

## 1. 目指してほしいこと

**選挙結果の図表を見て、何かしら感じる。**

**この授業で扱う政治過程のイメージを(なんとなく)つかむ。**

## 2. 計量分析…？

この授業では、「計量分析」「数量的分析」「統計分析」といった語を使う。当面、これらの用語は似たような意味だと考えてもらってよい。すなわち、数字・データを使って知見を得ようとするものととらえる。

この授業で扱う対象は、主として、現実を観察して得られた統計的なデータである。ここで「統計」とは、体系的に集められた（多くの）情報とそれを扱う方法を指す、と理解しておいてもらえればよい。統計的なデータは、通常は数値化して扱われる。

## 3. 政治・行政の計量分析…？

現在では、政治・行政を含めて、社会科学の様々な対象について、計量分析がなされている。

政治学の中では、伝統的には、選挙の研究で計量分析がよく用いられてきた。その理由の 1 つは、選挙の結果は特に計測する工夫をしなくても自然に、「票の数」や「議席の数」という数字で表現されているからだと考えられる。

選挙結果の例を示そう。2021 年衆議院議員総選挙（衆院選）の結果を表 1 に示す。ここでは、小選挙区部分の得票数と獲得議席数を、政党別に示してある。選挙結果というものが、まさに数字で表現されることが理解できるだろう。

さて、少し話はそれるのだが、表 1 の選挙結果の数値を若干加工してみよう。得票と議席の比率（小選挙区部分におけるもの）を算出して追加したのが、表 2 である。そして、この比率を帯グラフで表現したのが図 1 である（図 1 のうち、(a)と(b)は同じ内容だが、(a)はカラーでの表示・印刷用に作成されている）。元の情報は表 1 と同じだが、表 1 だけを見ると、表 2 と図 1 を参照するのとでは、印象が違わないだろうか<sup>1</sup>。ここで伝えたかったのは、「生の数字」のままではなく、それを加工することで、理解で

<sup>1</sup> ここで示された選挙結果の図表に、何かしら「ツッコミ」を入れたくなる受講者もいるのではないだろうか。これらの図表に関する感想・疑問なども、リアクションペーパー（RP）を書く際の格好の「ネタ」かもしれない。

きる内容が広がりうる、ということである。こうした「加工」の方法を工夫して行って、行き着く先が、本格的な計量分析だ、とイメージしてもらってもよいだろう。

#### 4. 分析対象としての政治過程

##### (1) 政治過程論・政治行動論

この授業で扱うトピックやアプローチは、「政治過程論」あるいは「政治行動論」という研究分野に属するものと言える。「政治過程論」と「政治行動論」は政治学の中の分野の名称であり、この授業の範囲では、これら2つの分野はほぼ同じ内容をカバーしていると考えてよい。

「政治過程論」ないし「政治行動論」では、選挙などの政治過程について、特にそれぞれのアクターの実際の行動に焦点を当てながら、理解することを目指す。ここで、「アクター」というのは、行動主体を指す言葉である。政治過程におけるアクターとしては、有権者、政治家、政党、利益集団などを挙げることができる。ここで、有権者が政治過程の一要素である（しばしば非常に重要な要素だとみなされる）ことを強調しておこう<sup>2</sup>。

##### (2) 政治過程

それでは、この授業の（あるいは政治過程論などの）対象となる「政治過程」とはどのようなものだろうか。これは文字通り「政治の過程」と理解してよい。では「政治」とは何を指すのだろうか。

政治の定義には、少しずつ異なるいくつかの種類があり<sup>3</sup>、これを厳密に考え始めるとこの授業の目的と乖離しすぎると思われるので、ここではごく簡単に、次のように考えよう。すなわち、大まかに言って政治とは、「みんなが守るべき事柄・みんなが従うべき事柄を、決めること」と理解してよい<sup>4</sup>。このように決められる事柄の内容の典型は、税金の集め方・使い方だろう。また、「決まったこと」は、最終的には法律やそれに準ずるルールとなることが多い。そして、政治が決めた（決める）内容が「政策」である、とも言える。

ここで重要なのは、第1に、政治の「出力」ないし「アウトプット」として政策が決まるということである<sup>5</sup>。

第2に、政策の内容は、「みんなが守るべき事柄・みんなが従うべき事柄」に該当するものであり、つ

<sup>2</sup> 若干話はそれるが、おそらく受講者は選挙権を有している有権者であると思われる。講師が選挙権を得たのは20歳のときだが、法改正がなされ、現在では日本国民は18歳で選挙権を得ることになっている。これに伴って、近年では主権者教育、つまり「良き有権者になるための教育」が、高校などで意識されているようである。もし受講者に「主権者教育」に関する経験などから印象に残ることがあれば、RPで知らせてもらえると、講師は喜ぶかもしれない。

<sup>3</sup> 例えば、飯田ほか（2015：序章）、砂原ほか（2020：1章）を参照されたい。

<sup>4</sup> もう少しだけ正確に言えば、「みんなが受け入れるべき事柄」を決めること、ということになるだろう。

<sup>5</sup> この点は、イーストン（David Easton）の政治システム論を念頭に置くと、理解しやすいだろう（Easton 1965）。

まりは「みんな」を巻き込むようなものだ、ということである。例えば、2019 年に消費税率の引き上げという政策が実施されたことを想起すれば、確かに「みんな」を巻き込んでいるものとして理解しやすいだろう。

### (3) 政治過程を図示してみると…

政治過程を可視化するために図示したのが、図 2 である。ここでは日本のような代表民主制・議院内閣制を前提としている。図の右側に、政治的な決定を直接的に下すアクターを配置した。政治家・政党は議会を構成し、議会は政府（行政府）のリーダーを決める。直接的にはこれらのアクターが政策を決定すると言える。その政策が実施されると、一般市民はその影響を受ける。先述のとおり、政策は「みんな」を巻き込むのである。

他方で、このような政策の決定に、一般市民も影響を与えることができる。主たる手段は選挙である。一般市民（の多く）は有権者として選挙で投票することができる。選挙によって、議会の議員が選出され、政党の議席数が決まり、結果として与党の構成・政府のあり方が左右される。

こうした過程を詳しく分析するのが政治過程論・政治行動論である。とりわけ、民主主義の「理念」（ないし「理想」）が念頭に置かれることが多い。民主主義の「理念」は、「自分たちが守るべき事柄を、自分たちで決める」といったものである。これを前提とすると、その「理念」（あるいは「理想」）がどの程度・どのように実現されるのかが重要な関心の対象となる。

この授業で扱うトピックを念頭に、図 2 の政治過程をもう少し詳しく描いたのが図 3 である。ここでは特に選挙の過程に注目している。有権者は選挙で投票することができ、その票を集計等した結果が、選挙での候補者の当選・落選を決め、議会での政党の議席数も決め、与党の構成に影響を与える。ここで、選挙の「やり方」によって、「有権者の票がどのように当選者や議席数を決めるか」が変わってくること、注意が必要である。

図 3 には、「政策意見」という要素も描き込んである。政策を直接的に決める政治家などのアクターは、それぞれ、政策に関する意見を持っているだろう。そうした意見が、決定される政策に影響を与え、結果として、一般市民の生活などに影響する。他方で、一般市民・有権者も政策に関する意見を持っていると予想される。要するに、政治家も有権者も、政策意見を有しているだろう。一般市民・有権者が、政府の政策のあり方をコントロールしたいとすれば、政治家の政策意見は重要な関心の対象となるだろう。

これらの、図 3 にある諸要素のうちいくつかを、この授業で扱っていきたいと考えている。

## 5. データの例

今後、しばしばデータとして、「東京大学谷口研究室・朝日新聞社共同政治家調査（東大朝日政治家調査）」のデータを用いようと考えている。この調査は、選挙のたびに候補者を対象として実施されているものである。その際の調査項目の例を調査項目 1 に示す。

このデータのうち、2022 年参院選時のものを、以下のサイトで探ることができる。リンクを Moodle 上

にも示しておく。関心のある受講者はこのサイトにアクセスし、データを探索してみるとよい<sup>6</sup>。

2022 年参院選時のサイト： <https://www.asahi.com/senkyo/saninsen/2022/asahitodai/>

上記のサイトを開くと、図 4 のような画面が現れる。政党間の比較は「会員」にならなくてもできるので、してみるとよいだろう。「政党比較」をクリックすると図 5 の部分にジャンプできる。ここで最初「防衛力強化」と表示されている部分はプルダウンメニューになっているので、ここを操作することで、他の項目についての情報を見ることができる。

## 6. できたこと

**選挙結果の図表を見て、何かしら感じることができた。**

**この授業で扱う政治過程のイメージを(なんとなく)つかむことができた。**

### 文献

飯田健・松林哲也・大村華子. 2015. 『政治行動論』有斐閣.

砂原庸介・稗田健志・多湖淳. 2020. 『政治学の第一歩 新版』有斐閣.

Easton, David. 1965. *A Framework for Political Analysis*. Prentice-Hall.

---

<sup>6</sup> このサイトの情報を詳しく見て考えたことがあるなら、それを RP に書いてももちろん構わない。